

人間教育学部開設記念シンポジウムを開催

共に創る、 地域の学びと未来の社会

2025 年 6 月 1 日（日）、人間教育学部の開設を記念したシンポジウム「共に創る、地域の学びと未来の社会」を桃山学院大学エレノア館で開催しました。白井俊氏（内閣府科学技術・イノベーション推進事務局参事官）を迎え、「世界の教育はどこへ向かうか」と題した基調講演では、OECD の教育動向を踏まえ、主体性の概念や探究型授業のあり方など日本の教育課題について指摘されました。第 2 部では、「学修者中心の学びと大学の役割とは」をテーマにパネルディスカッションを展開。地域社会と連携した教育の重要性について意見を交わしました。学部設立により地域の教育力向上が期待され、自治体関係者も大学の取り組みに注目。和泉市の大槻亮志教育長は「本市の学校教育に多大な貢献をいただいています」と述べられ、堺市の関百合子教育長は「教育の質の向上は重要な課題。人間教育学部が地域の教育力を高める存在に」と期待を寄せていただきました。



白井参事官が基調講演

「世界の教育はどこへ向かうか」と題して基調講演していただいた白井参事官は、文部科学省で初等中等教育企画課教育制度改革室長などを歴任され、海外では OECD（経済協力開発機構）教育スキル局で研究に取り組まれました。白井参事官は、PISA（国際的な学習到達度調査）で学力世界一だったフィンランドが順位を落とす一方で、シンガポールがトップに躍進していることを紹介。シンガポールは小学校卒業試験の成績で将来の進路が決まる非常に厳しい競争社会となっている側面があることなどについて説明されました。

また、近年の教育で重視されている「主体性」について、OECD が提唱している「エージェンシー」の概念を使って解説されました。エージェンシーとは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」という概念で、他者との関係性の中で育まれます。白井参事官は、主体性には教師と生徒の関係や生徒の発達レベルなどで様々なケースがあることを指摘され、探究型授業の再検討や学校の将来像などについても問題提起をしていただきました。

パネルディスカッション 「学修者中心の学びと大学の役割とは」

第 2 部のパネルディスカッションでは、白井参事官、中野瑞彦学長、二瓶弘行人間教育学部教育監（教授）が、中村浩也人間教育学部長の司会で、「学修者中心の学びと大学の役割とは」のテーマで議論しました。

「学修者中心の教育をどう考え、進めるのか」という中村学部長の問題提起に対し、白井参事官は「学修者中心というのはある意味で当たり前のことだが、エージェンシー

の考え方には『責任』という概念もあり、学生にも大学というコミュニティに属している責任があると考えなければならないか」と、教育を受ける側の姿勢、態度の重要性を指摘されました。

統合前の桃山学院教育大学と本学の学長を兼務していた中野学長は「二つの大学を比較すると、桃山学院大学は教員が教えたいことを教えるという「教員中心の教育」の面がある。また、文・社会科学系総合大学では大学で学んだことを卒業後すぐに活かして活躍することは難しい、希望の職業に就くとは限らない。一方で、人間教育学部の学生は 4 年後にすぐに教育現場に立つために、今何を学ぶ必要があるかを踏まえた教育が実践されていた」と振り返りました。

研究校（筑波大学附属小学校）で長年国語教育に取り組んだ二瓶教育監は「授業は教師だけが創るものではなく、生徒が、仲間と教師と共に創るのだという学習意識を持つことが必要だ。人間教育学部の学生には自ら主体的に授業に参加する姿勢を求めている。社会に出て、『授業者』として生きる学生との大学授業だからこそ、学修者中心でなければならない」と、教員養成のために学修者中心の教育が重要であると強調しました。



桃山学院大学学長
中野瑞彦教授

「誰一人取り残さない教育」のために

最後に「誰一人取り残さない教育」について考えました。中村学部長が「小中学校の不登校児童生徒が 11 年連続で増え、34 万人を超えている。大学はやる気のある学生だけを引き上げる、という教育でいいのか。」と問題提起したのに対し、中野学長は「大学生は 18 歳以上で既に成人。どうやって（不登校の状態から）大学に戻していくのかは大変難しい。大学教育の使命は社会にどう関与していくのかを考え、訓練する場で、そのことを入学時に訴えていくことが大事だろう」と話しました。白井参事官

は「不登校は危機的状況だが、いろいろな事情があり、学校では対応できないこともある。家庭の問題が原因ならソーシャルワーカーに協力してもらうなど、社会のいろいろな力を使って対応していくため、支援を求める力をつけてもらいたい」と訴えました。

二瓶教育監は「『誰一人取り残さない教育』こそ桃教から桃大人間教育学部へと引き継いでいくスピリット。（問題を抱え）講義に出席が出来ない学生に対して、教員一人で対応するのではなく、情報共有してチームで学生を育てようとしている。そういう教員の姿勢を学生は見ており、将来教師になった時に、きっと、子どもたちとそのような関わり方をするだろう」と、人間教育学部の教育姿勢の意義を強調しました。



和泉市教育委員会教育長
大槻亮志氏



堺市教育委員会教育長
関百合子氏

地域の期待

人間教育学部は旧桃山学院教育大学と本学が統合して、今年 4 月に発足しました。教育人材を地域に送り出すとともに、教育実習等で地元自治体の教育委員会にお世話になっています。本日のシンポジウムの冒頭で、中野学長は「桃山学院教育大学と統合して発足した人間教育学部には今年、定員を超える学生が入学し、注目を集めています。地域を支える人材育成を重視して大学を運営していますが、本日のシンポジウムでは地域における今後の新しい大学の学びはどうあるべきかについて考えたい」とあいさつしました。来賓として出席いただいた和泉市の大槻亮志教育長は「桃山学院大学と本市はこれまでも包括連携協定を結んでいたが、今年 3 月には教育委員会とも連携協定を締結、本市の学校教育に多大な貢献をいただいています」と述べ、堺市の関百合子教育長は「教育の質の向上は重要な課題。人間教育学部が地域の教育力を高める存在となることを期待します」と激励していただきました。

